

RUN! RUN! RUN!

特集

ランクル魂!

スシ、テンブラ、フジヤマ...そして「ランドクルーザー」。
これらは世界の人々が日本をイメージする言葉なのである。
世界の果て...とくに辺境に行けば行くほど、
ランドクルーザーは必要とされ、重宝されていることを
ランクル生産国である日本では意外と知られていない。
電子化が進んだ現代においても、世界の人々が欲するのは「タフな移動手段」なのだ。
今回の特集では、世界が認める世界最強の四駆...ランドクルーザーの
本当の実力、本来のあるべき姿などをレポートする。
ランドクルーザーが何故世界で愛され続けているのか...
その理由を紐解くことにしよう。



PART 1 **MADE IN EARTH!**
世界を駆けるランドクルーザー

CONTENTS

PART 2 **200 vs 150**
国産最高峰オフローダー対決

PART 3 **LC CUSTOM**
ハイセンス・ランクルを始めよう!

ランクルの真髄は 走りにアリ!

LAND CRUISER ECSTASY

TEXT

●難波 毅、高坂義信、石上智章、鈴木 優

PHOTO

●難波 毅、浅井岳男、古閑章郎、TOMO'S PHOTO

取材協力

●さなげアドベンチャーフィールド (0565-46-5511 <http://www.lc-saf.co.jp>)

●JAOS (<http://jaos.co.jp>)

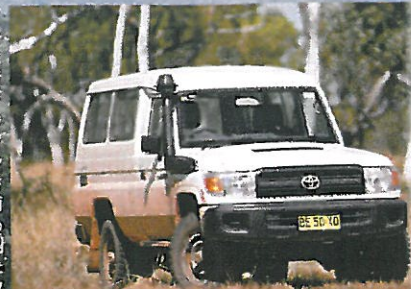
●FLEX (<http://www.flexnet.co.jp>)

●DOUBLE EIGHT (<http://www.double-eight.jp>)



ニュー・サウス・ウェールズ州のモリリーという町にあるノーウッド農場にはユート4台、200、80など合計7台のランドクルーザーを所有している。管理棟の前に並べて壮観なシーンを撮影した。

ランドクルーザーのマーケットは広い。オーストラリアにだけV8ターボディーゼルの搭載した70系が存在する。搭載されるV8ターボディーゼルのターボは、通常のV8エンジンと異なり、エンジンと一体で構造されている。エンジンの出力は、最大トルクが1200kgfcmという低回転で発生し、3200回転まで一定という、低回転トルク特性で、低燃費はバツグン。1999年のフロントのホイール化や、2007年のフロントレフトの拡大など、サスペンションとも進化。フロントの落ちつきは特長。ダートでもゴツゴツ感を感じることなく、空荷に近い状態でもリアが跳ねてスライドすることはなかった。8,000kmを走行し平均燃費は8.1km/L。舗装路では制限速度一杯で、ダートでは四駆に入れてガツリ走り回った数字にしては立派なもの。ツーリング仕様にしてアウトバックのキャンピング旅行を思い切り堪能してみたい。



V8J78V

地球全土で愛され信頼される「最強の四駆」ランドクルーザー



ノーウッド農場のオーナーであるピーター・グレイニー。優秀な生産者として数々の表彰を受けてきた「コットン・キング」であると同時に、「COITON」というライセンスプレートを付けた80でオーストラリアン・サファリをはじめ各種のオフロードレースに参加している現役のラリードライバーでもある。

2008年にオーストラリアでのランドクルーザーの半世紀の歴史を描いたDVD第1弾をリリースした。それから1年、2009年秋に第2弾の制作を開始。タイトルは「Toyota Land Cruiser Performance」地球が舞台の「ランドクルーザー」。

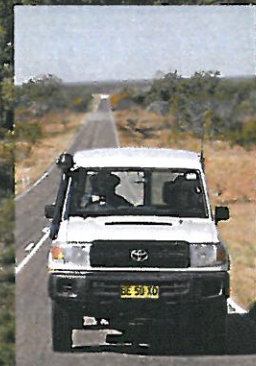
まらない。地球上でランドクルーザーを見かけない場所はない。といわれ、環境が過酷になればなるほど、生き生きとくるのがランドクルーザーだ。地球上のさまざまな国で働くランドクルーザーの姿を記録しようというのが第2弾の企画趣意であった。

取材先との半年間にわたる連絡、交渉、調整を経て2010年4月、アメリカ最大のランドクルーザーイベントのひとつである「クルーズ・オブ・ザ・ネイション」が開催された。その後のポーターランド・オーストラリア・アフリカ諸国を訪れ、今年1月の中東取材で終えるまで1年間で11カ国を回った。時間的・予算的に南アメリカ大陸へは足を伸ばすことができなかったが、いろいろなシチュエーションで活躍するランドクルーザーの姿を収録することができた。本企画では、そのときに取材した各国、各地域のダイジェストをお届けしよう。

MADE IN

EARTH 世界を駆ける ランドクルーザー

RUN! RUN! RUN!
クルーザー魂!



工具や機材を備え付けた特別製の荷台を積んだ姿は鉱山や鉄道会社、通信会社などでも良く見られる。ランドクルーザーが道具として使われている証だ。

AUSTRALIA

日本で生まれ、オーストラリアで育ったランドクルーザー

日本の21倍の面積を持つオーストラリアは、その国土の7割が「アウトバック」と呼ばれる乾燥した超過疎地域である。このアウトバックこそランドクルーザーがもつ活躍する地域で、別名「トヨタ・カンタリー」でも知られる。

1959年の輸入開始以降、その耐久性・信頼性で地域開発に欠かせない存在となり、グリルの中央に輝く「TOYOTA」の文字を見つけてきたアウトバックの人たちが自分たちの地を「トヨタ・カンタリー」と呼ぶようになったことは必然であった。

オーストラリアの「ユザー」の使い方は時に「虐待」と呼ばれるほどに容赦ないものだ。ランドクルーザーの信頼性・耐久性・安全性は「このクルマなら信じられる」「命を預けられる」という自信に近い絶対的

ノーウッド農場の中を走る79ユート新102モデル。キャブシャシーモデルは現地の荷台を架装したモデルは「ユート（Ute）」と呼ばれる。ユーティリティ（Utility）を短縮したこの呼び方は、オーストラリア独特の表現だ。



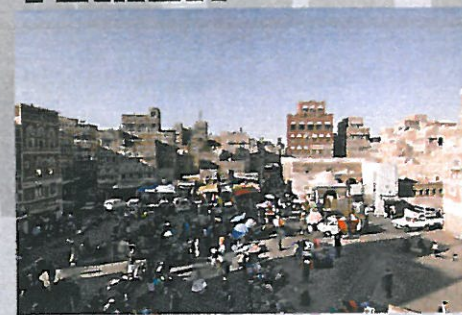
四駆の名車は数多く存在するが、本当の意味で「最強の四駆」といえば、世界の人々は「ランドクルーザー」というだろう。どのような環境にも対応、高い信頼性とタフネスを誇るランドクルーザーこそが、地球でもっとも信頼される四駆なのだ。今回の特集では、世界のさまざまな場所で活躍するランドクルーザーの雄姿をレポートすることにした。

PHOTO&TEXT ● 難波 毅

ノーザンテリトリー北部熱帯地方のケープクロフォードとボロレーラを結ぶダートをフルダスト（道路の奥に溜まった細かい砂）を巻き上げながら走る。



YEMEN



門の上から俯瞰したサナア旧市街。中世の雰囲気を残すレンガ造りの建物が残り世界遺産に登録されている。迷路のようになっている中へ入ると、ありとあらゆる種類の店が密集して、タイムスリップしたような感覚にとらわれる。



アラビア半島、紅海に面するイエメン。古くより交易の中心地として繁栄。古代ギリシャや古代ローマの時代には「幸福のアラビア」として知られた歴史のある国である。首都サナアの街中では路上に商品が並べられ歩きながら品定めをし買い物をしている。

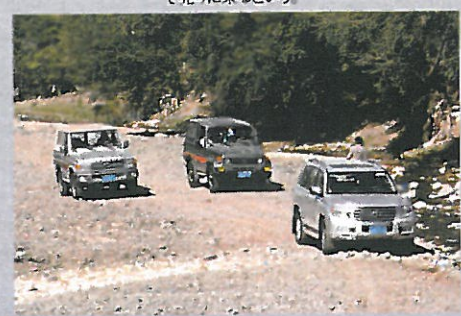
旧市街の商店の並ぶ路地を行くランドクルーザー100。観音車が多いのは中東独特の風景である。



サナアでは60がまだ現役。屋根に荷物を満載した姿も珍しくない。



イブの町の道端に置かれた45ピックアップ。農家のアデルさんがスイカを売っていた。時期それぞれの作物をランドクルーザーに積んで売りに来るという。



サナアから200km。地方都市イブの近くのジャナット渓谷には3台のランドクルーザーが遊びに来ていた。シーズンには避暑客でにぎわうという。



旧市街へ入る門の前で待機するランドクルーザーレッカー。慢性的な渋滞の中、故障車が出た場合に備える。

OMAN

アラビア半島の東南端、ペルシャ湾の入り口となっているオマーン。首都マスカットのマトラー地区。白壁の建物が立ち並ぶ港町マトラー地区。建築規制で高層の建物が建っていないのでとても落ち着いた雰囲気が漂う。日本から中東に輸出されるランドクルーザーが最初に荷揚げされるのもこのマスカット港である。



首都マスカットの背後には大きな砂丘が迫る。ほんのわずかなドライブで本格的なデュンドライブが手軽に楽しめる。オマーン専用特別色の200系60周年記念モデルが豪快に砂を巻き上げていた。



船が戻るのを待つHZJ79ピックアップ。荷台には保冷庫が積まれている。魚をここで買い付けマスカットまで運ぶ。



首都マスカットから約1時間の距離にあるバルカは漁業の盛んな町である。漁業の規模は小さい。捕れた魚を手でつかんで浜を上がったところにある魚市場へ運ぶ。



サウジアラビアはランドクルーザーの最大のマーケットである。たくさん70系が国境警備隊に配備され街中には200系が溢れる。石油長者の注文の仕方はケタはずれて200系の全てのモデルを「一気に注文したり、マイナーチェンジのたびに次々と追加したりと凡人の想像をはるかに超える。

カタールは「ランドクルーザーのオナー」でなければカタール国民とはいえない」というお国柄で、イスラムの週末にあたる金曜の日午後になると首都ドoha近郊の大砂丘には次々とランドクルーザーが集まる。グループで個人でフラットな砂丘を時速150kmで疾走したり、緩やかに曲線を描く砂丘をフルスロットルで縦横無尽に走り尽くす。

「中東の金融センター」であるアラ

まさにランドクルーザー天国
といった様相の
中東諸国

MIDDLE EAST

LAND CRUISER
in the world
2

SAUDI ARABIA



サウジアラビア第2の都市ジッダ。メッカへの巡礼者の中継地点であり、多くの国際機関や金融機関が本拠を置く経済都市でもある。ジッダから北東にクルマで1時間、ムーンマウンテンがある。この日はレイさんがデイトリ、ブに誘ってくれた。レイさんは200系ランドクルーザーを砂漠ツーリング用にカスタマイズして乗っている。150プラドととも1台の200も同行した。



サウジの民族衣装である「トウブ」と、スカーフのような「シマク」姿でプラドを誘導する。オフローディングにもかかわらず全員がこの姿で参加していた。



午後3時過ぎにドバイを出発したツアーは1時間ほど走った砂漠地帯でコンボイを編み、一列になって暮らように砂丘を越えていく。ランドクルーザー200なら普通道に何でもなく走ってしまうのだが、観光客相手には多少の派手なアクションといった演出も必要だ。車間距離も短めにすることで前を走るクルマの派手な動きも楽しめ、自分のクルマの傾きとオーバーラップした感覚が倍加する。ドライバーガイドになるには専用のトレーニングエリアでの厳しい訓練があり200%OKでなければドライバーになれないという。

UAE

オリエント・ツアーズは砂漠ツアーの最大手。所有する15台のクルマは全てランドクルーザー。半分は最新の200系だ。この日は参加者が多く、自社のクルマだけでは足りず応援車両も借り集められた。夕方に始まるツアーは砂漠を走り抜けた後、キャンプ場での夕食、ベリーダンスの鑑賞と続く。熱帯したドライバーの語るような見事なドライブに酔いしれ、異国情緒に浸る。



SOUTH AFRICA

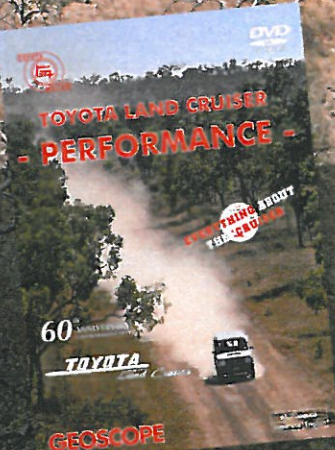
やがて道はクルマ1台がやーと通れる狭い峡谷へと入っていく。「恋人たちの小径」というしゅれた名前が付けられたこの峡谷は昼でも鬱蒼としたジャングルめいた場所で夏には浅い川となる。



キャンプ地は一帯でもっとも標高が
キャンプ地手前の「男かネズミか」とい
ースの途中でエンジンをストップした
れて脱出。見た目以上に難関だった



南アフリカをベースとするランドクルーザーのユーザーの集まりである「ランドクルーザークラブ・ササニ・アフリカ(LCCSA)」が企画した「ブントゥトレイル・オフロード・イベント」に参加した。ラスト・デ・ウインター自然保護区に近い4×4ATVという四駆クラブが所有するキャンピング地を起点に13台のランドクルーザーが週末2日間、80kmのトレイルを走した。1「ブントゥトレイル」はキャンピング地周辺の牧場や公有地の中を走る全長80kmの四駆トレイルで、許可を受けた4×4ATVのガイドが同行しなければ入ることはできない。今日は4×4ATV代表のピーター・クレーセンともう1人が前後に付いて案内してくれた。ヨハネスブルグ周辺では有名なトレイルで一部ハードなセクションもあるが、ガイドの上手な誘導で初心者でも十分楽しめる。長い坂道を取ってナビエなどに設置されたファルリアーに橋脚に出かけることのできる南アのランドクルーザー・ファンにとり、最も友人と手帳に週末を楽しむ絶好のコースとなっている。



問い合わせ●(有)ジオスコープ
www.geoscope-inc.com
価格●2,980円(消費税・送料込み)

**TOYOTA LAND CRUISER
—PERFORMANCE—**

壮大なスケールで描かれる
 世界のランドクルーザー・ストーリー

1986年以来、ランドクルーザーを足としてオーストラリア大陸の奇
 岩風景を撮影し続ける写真家・澤波渡が制作したランドクルーザ
 DVD-videoの第2弾。ランドクルーザーをテーマにした第1弾から、さらにス
 テージを拡大。今作品は世界11カ国で活躍するランドクルーザーの雄
 姿を収録。取材・撮影、さらに編集まで基本的には一人で行なったが、現
 地ではたいていのランドクルーザー・ユーザーがアシスタントとして参加し、
 迫力あるシーンを収録。最も安心して命を預けられるクルマランドクル
 ーザーが満載のラングム見DVDだ。YouTubeにてプロモーション映像
 を公開中。検索キーワードは「GO.CAR.CROUSEVISION」。(112分収録)

AFRICA

NAMIBIA

エトシャ国立公園はナミビアの代表的な野生動物公園である。22,000km²の公園内は自分で運転して回れる。ナミビアは治安が良く、園内の道路が分りやすいので欧米からの観光客がレンタカーで楽しむ姿が多く見られた。園内は動物優先。老いたアフリカゾウが悠然と道を横切る。



フィリップ・スタンダー博士、デザート・ライオン・プロジェクトを以て手がける。



「デザートライオン・コンサベーション」と名付けられたスタンダー博士の活動は、ナミブ砂漠北部のクネネ地方に生息するライオンを保護することを目的としている。この地帯には世界でも珍しい砂漠環境に適合したライオンが多数棲息している。最近には家畜の放牧を行ない農家との摩擦や、ハンティングの影響で殺されたライオンの数が増えている。ナミビアのライオンは観光資源としても重要な「人間との共存共栄」を求め、1998年から保護活動に必要なライオンの生態調査を始めた。主要な個体には電波を発信する首輪などが付けられ、毎日モニタリングしている。ライオンは夜行性のため博士の日常も夜はリサーチ、昼はクルマの脇で寝るといふスタイルだといふ。

博士は当初、ハイライフを使っていたが、老朽化近しいので代替車を探していた。2007年12月、博士と偶然に近しい会いとしてLCCSのメンバーがこの話を博士に持ち帰り、募金活動を行なうことが決まった。2008年2月に募金活動が実際に始まり3月末までに140,000円(約17万円)が集まった。WWF-Lifeがその資金を南アフリカのヨカラの寄付先を含めた資金で4月末に2004年モデルのBMW719LPを購入した。すでにダブルキャビンに改造されたビックアップにはクラブメンバーの手でさらに装備が追加された。6月下旬に引き渡し式が行なわれ、7月1日より調査活動に使用され始めた。

スタンダー博士がデザート・ライオン・コン



ページで使うスキャナル・ブックから、
「サー」を取材すべくウエスト・トリップエ
が終った翌日の月曜日、朝1番の飛行機
で南アフリカからナミビアへ飛んだ。首者
ウィントホークの空港にはLCCSAのメン
が出迎えてくれた。途中、ほかのメンバ
の3台のランドクルーザーと台湾、スタン
ー博士とのランデブーポイントであるスク
ルトンコーストを目指し一路西へ向かった。



「アフリカの中のヨーロッパ」と称される南アフリカ。この国で最大のランドクルーザークラブである「ランドクルーザークラブ・ササニア・アフリカ(CCSA)」の最大の特徴は社会貢献活動だ。2008年にはメンバー全員が基金活動を行ない、隣国ナミビアでライオンの保護活動を行なっているNGOに79バックアップを寄贈している。

タゲザアはアフリカの中の「ランドクルーザー天国」だ。タンザニアでは自動車の80%が中古車である。そして日本からの輸入車である。そのうちトヨタのシェアは70%で、四輪駆動車の中でのランドクルーザーのシェアは45%(2010年11月)と高い。

LAND CRUISER
in the world **3**

ランドクルーザーが
命をつなぐアフリカの地

経済の中心地であり実質的な首都機能もあるタルエスザームの近代的な建物が立ち並ぶ中心地の交差点に立てば、すぐにランドクルーザーがひっきりなしに往來するシーンを目の当たりにできる。二万、三万、四万と頻りに車を走らせる。官庁街近くでは200系が頻繁に見られる。個人ユーザーが200系を所有することはまれで、ほとんどが政府官公庁向けだが、大臣クルマはVXモデル、高級幹部はGXモデルとクルマにもヒエラルキーが影響する。

最近では、長らくランドローバーの牙城であった警察でもランドクルーザーが使われ始めた。また多くのランドクルーザー救急車にも出会うた。町を少し離れると道路状況は悪く、ひとたび雨が降れば泥の海となる道も多い。タンザニア最大の町といえどもランドクルーザーの救急車が必須なのである。

四輪駆動車で野生動物を見に行く「ケームドライブ」。レンジャーやサファリ社はタンザニアアルシバをベースとするツア会社だ。駐車場には特別に改造されたH2V79ランドクルーザーがずらりと並び、現在ではランドクルーザーが独占していて毎年15～20台を入れ替えているという。しかし新車は改装費や税金を入ると1台85,000USDにもなり、「このまま円高が続くと将来ランドクルーザーを使い続けられるかどうか不安」と取締役のサンジェイは舌を巻く。



レンジャー・サファリ社のランドクルーザー・サファ
カーはJH719年ピックアップの10台をばし、シエン
を中央部と輪郭でそれぞれ50台50台、また
観のボディを架装している。改装はアルファ市
にある特設倉庫で行なう。天井は高さ5mの開口
があり、その部分の屋根がたゞ80cmの高さとな
る。このポップアップルーフとなつた。また、右の
バックシートがめつたりと配置された。車内には溶接
充電用ケーブル、2台の無線機と、そのほかの機
材、もちろんスベツトタイヤは本バリエーションで
備へた。よつて搭載されているBSのデュー・AT
1台は使用され、機内では9FCに充たつたため、
各は9FC・オルタン・エンジンが稼働している。先
走は各を950BSの4台で統一されている。

[illegible]

TANZANIA